報　告

点滴処置を受ける幼児への医師・看護師のことばかけ
― 紙上事例を用いた自由記述の内容分析 ―

島田　茉歩[1]，仁尾かおり[2]

Expressions used by physicians and nurses for pediatric patients receiving infusion treatment
― Content analysis of a descriptive survey involving case examples ―

Maho SHIMADA and Kaori NIO

Abstract

The present study, involving pediatric physicians and nurses working in a hospital, aimed to examine expressions used by them when talking to pediatric patients receiving infusion treatment.

A descriptive survey, involving case examples of pediatric patients aged three and five years old undergoing an intravenous drip of antibiotics, was conducted, and the results were analyzed Berelson's content analysis method.

The analysis results were classified into the following four categories: [Helping children maximize their abilities], [Respecting the rights of children], [Encouraging the independence of children], and [Helping children feel secure]. [Helping children maximize their abilities] included {Recognizing and praising children's efforts}, {Talking to children to distract them}, and {Asking children not to move}. [Respecting the rights of children] included {Explaining grounds/reasons for conducting infusion treatment}, {Explaining the effects of infusion treatment}, and {Informing children of their conditions}. [Encouraging the independence of children] included {Suggesting methods for children to exert efforts}, and {Asking children not to move}. [Helping children feel secure] included {Informing children that treatment will soon be completed} and {Informing children of progress in treatment}. To help children understand "infusion", the health care professionals used the following expressions: "This may sting a bit", "This medicine kills germs", and "I am going to put a straw into your arm".

The results suggested that if physicians recognize and praise children's efforts during infusion treatment, their self-regulatory functions will be improved, which will help the physicians continue the therapy smoothly. Furthermore, since children have rights to receive specific explanations of treatment and nursing care that they are going to undergo, it is necessary for health care professionals to provide explanations according to the growth and development of each pediatric patient. Children's independence will be enhanced by explaining what you want them to do during treatment. Since it is difficult to describe infusion in words that can be easily understood by children, the physicians and nurses explained it to pediatric patients by describing its effects and the shapes of instruments.

Key Words: pediatric patients, infusion treatment, expression

1　伊勢赤十字病院
2　三重大学大学院医学系研究科看護学専攻　実践看護学領域　小児看護学分野

I．はじめに

小児看護の領域では小児のコミュニケーションに関して多くの研究が行われてきた．よく使われていることばは，日常に存在していることばであり，また，日常的に使われないことばはそのままのことばで使われており，経験がないことに関しては，そのままのことばで表現されることが多いということが明らかになっている（和田・濵邊，2014）．幼児後期には日常的で広く用いられることば（共通語）が多く使われるようになるが，看護師は日常生活でも使われるような平易なことばを用いている．また，医療に関する分野で公的に用いられることば，いわゆる専門用語や医療特有のことばは，わかりやすいことばで表すことが難しく，一語で表すというよりも文章で説明していると考えられている（和田，2012）．

小児に対して説明を行う方法として，プレパレーションがある．プレパレーションに関する研究も多数行われているが，その中でも効果に対するものが最も多く，ことばに関する研究は少数である．

看護場面で使用されることばに対する研究（和田・濵邊，2014) では，経験することが多くても日常に存在していないことばは，日常で使うことばに変化させて使い，経験が少なく日常でも使わないことばは他のことばにも置き換えられていないと報告されている．また，擬音語・擬態語として表現をしても日常で使われていないことばの使用は少なかったということが明らかになっている（和田・濵邊，2014）．しかし，動作に対する説明方法については明らかになっているが，内容・理由に関する説明の仕方については明確にはなっていない．また，吸入療法のことを「モクモク」と言い換えるように，言い換えが可能なことばに関しては言い換え方が明示されているが，専門用語について説明を行う際の詳細については，未だ明らかになっていない．

点滴は子どもの入院生活で多い処置であり，幼児期の認知機能では理解しにくく，痛み・恐怖感を伴う処置である．点滴留置によって，体動・行動範囲も制限されるため精神的な苦痛も強いられる．

子どもの病気理解は 2 歳頃に始まるが，幼児期は日常のしつけのために罰が使用されるため，病気を罰として捉えると考えられている．そして，幼児後期には「感染の概念」が現れ，汚いもの（うんちやおしっこなど）に触れると病気になると考えるようになる．その後，感染の概念には「ばい菌」という介在物が加わり，アニメに登場する「ばいきんまん」のように擬人化されたキャラクターを病気の原因として理解するため，予防教育や病気の説明が可能になる（市江，2014）．

幼児とのコミュニケーションにおいて，子どもに伝わり易いように，オノマトペを使用することが多くみられている．オノマトペとは擬音語・擬声語の総称であり，「ザーザー」や「ドキドキ」などを言語描写したものである．小児医療現場でのオノマトペに関する研究では，小児病棟の看護師は医療場面における幼児への説明でオノマトペを多用しており（石舘・谷田部・山下・宍戸・久保・鈴木，2014），看護師の発話には「オノマトペ＋する」動詞，繰り返しの表現のオノマトペ，オノマトペ語彙を係り元と，係り先を一般動詞とする端的な表現が多い（石舘・山下・いとう，2015）ということが明らかになっている．

入院生活の中で子どもと関わる機会・時間が多いのは看護師であるが，処置時には看護師だけでなく医師も子どもと関わる．医師・看護師のことばかけの内容を明らかにすることで，子どもへの説明内容・方法を検討する一助となると考えた．本研究は，点滴処置を受ける幼児への医師・看護師のことばかけを明らかにすることを目的とした．

II．用語の定義

幼児前期：1～3 歳の子ども
幼児後期：4～6 歳の子ども

III．研究方法

1．研究期間

2016 年 8～9 月

2．研究対象者

A 病院の小児科医師，小児病棟看護師

3．調査方法

小児科科長・病棟看護師長に対し，研究協力依頼文書を用いて調査依頼を行い，研究協力依頼文書・調査用紙・提出用封筒を袋に入れたものを秘書・病棟看護師長から研究対象者に配付した．研究棟・病棟などそれぞれの所定の位置に回収箱を設置した．回答済み調査用紙を提出用封筒に入れ，封をした上で，回収箱へ提出されたものを回収した．

4．調査内容

1）職種，性別，小児看護（NICU，小児外来も含む）・小児診療経験年数
2）抗生物質の点滴処置の前・中・後に 3 歳児・5 歳児

へどのような説明を行うか，以下の事例に対する自由記述．説明内容を統一するため，本研究では抗生物質の点滴に限定した事例を提示した．

事例 1 肺炎で発熱・咳嗽のある A くん（3 歳）に抗生剤の点滴をするために静脈留置針を左前腕に穿刺することになりました．A くんは初めて点滴をします．

事例 2 肺炎で発熱・咳嗽のある B くん（5 歳）に抗生剤の点滴をするために静脈留置針を左前腕に穿刺することになりました．B くんは初めて点滴をします．

5. 分析方法

以下の 2 つの分析を行った．

1）分析は Berelson,B. の内容分析を用いて，医師・看護師別に事例毎，時期毎に行った．記述の 1 内容を記録単位とし，個々の記録単位を意味内容の類似性に基づき分類し，カテゴリーネームをつけた．各カテゴリーに包含されたことばかけの記録単位数を算出し，カテゴリー毎に集計した．カテゴリーの信頼性を確保するために，小児病棟での臨床経験を持ち，小児看護学を専攻している大学院生 2 名によるカテゴリー分類を実施し，一致率を Scott,W.A の式により算出した．一致率は 70.7～82.1% であり，信頼性は確保されていた．

2）「点滴」を説明する際のことばかけを抽出し，出現頻度を数量化した．

6. 倫理的配慮

研究対象者へは調査用紙とともに研究協力依頼文書を同封し，①研究の目的・意義，②回答された内容・秘密は厳守すること③調査への参加は自由意思であること，④不参加の場合でも不利益はないこと，⑤回答は研究目的以外では使用しないこと，⑥個人を特定するような内容は公表しないことを説明した．なお，本研究は，研究者の所属施設の研究倫理審査委員会の承認を得て行った．

IV. 結果

1. 対象者の属性

医師 19 名に配付し 11 名より回答があった（回収率 57.9%，有効回答率 100%）．男性 10 名，女性 1 名，経験年数平均 12.3 ± 7.7 年であった．

看護師 29 名に配付し 20 名より回答があった（回収率 69.0%，有効回答率 100%）．女性 20 名，経験年数平均 4.0 ± 3.5 年であった．

2. 点滴処置を受ける幼児への医師・看護師のことばかけ

点滴処置を受ける幼児への医師・看護師のことばかけを，カテゴリーを【 】，生データを「 」を用いて表記する．

1）点滴処置を受ける 3 歳児への医師・看護師のことばかけ（表 1）

(1) 3 歳児への点滴処置前のことばかけ

医師では，合計 24 個のことばかけがみられ，【今からすることを伝える】，【励ます】，【痛いということを伝える】，【点滴の根拠・理由を伝える】，【泣いてもいいことを伝える】，【動かないように伝える】等の 9 カテゴリーが抽出された．

①【今からすることを伝える】（5 記録単位：20.8%）「ちっくんする」，「点滴の針を入れる」の記述から構成された．

②【励ます】（4 記録単位：16.7%）「がんばろう」の記述から構成された．

③【痛いということを伝える】（3 記録単位：12.5%）「痛い」，「少しちくっとする」の記述から構成された．

④【点滴の根拠・理由を伝える】（3 記録単位：12.5%）「ばいきんをやっつけるため」，「お水，お薬を入れていくための」の記述から構成された．

⑤【泣いてもいいことを伝える】（3 記録単位：12.5%）「泣いてもいい」，「泣いても大丈夫だから」の記述から構成された．

⑥【動かないように伝える】（3 記録単位：12.5%）「うごくとちがでるからうごかないで」，「うごかないでね」，「手を動かさないでね」の記述から構成された．

看護師では，合計 53 個のことばかけがみられ，【今からすることを伝える】，【点滴の根拠・理由を伝える】，【励ます】等の 8 カテゴリーが抽出された．

①【今からすることを伝える】（21 記録単位：39.6%）「（今から）ちっくんするよ」，「こっちの手に（ここに）ちっくんするね」等の記述から構成された．

②【点滴の根拠・理由を伝える】（15 記録単位：28.3%）「(A くんの体の中にいる）バイキンさんをやっつけるために」，「お薬を（体の中に）入れるために」，「バイキンをやっつけるお薬を (A くんの中に）入れるために」等の記述から構成された．

③【励ます】（7 記録単位：13.2%）「（一緒に / お母さんと一緒に）頑張ろうね」，「がんばれるかな」等の記述から構成された

(2) 3 歳児への点滴処置中のことばかけ

医師では，合計 20 個のことばかけがみられ，【すぐ終わるということを伝える】，【動かないように伝える】，

【励ます】等の 8 カテゴリーが抽出された．

①【すぐ終わるということを伝える】(5 記録単位：25.0%)「すぐ終わるからね」等の記述で構成された．

②【動かないように伝える】(4 記録単位：20.0%)「もう少し動かないで」,「うごくとちがでるから」,「うごかないでね」,「じーっとしてたらすぐおわるよー」の記述から構成された．

③【励ます】(3 記録単位：15.0%)「頑張ってね」,「がんばろーねー」の記述から構成された．

看護師では，合計 50 個のことばかけがみられ，【頑張りを認める・褒める】,【励ます】,【進行状況を伝える】,【動かないように伝える】等の 10 カテゴリーが抽出された．

①【頑張りを認める・褒める】(20 記録単位：40.0%)「つらいね」,「えらいね」,「がんばってるね」,「おりこうさんやね（だね）」等の記述から構成された．

②【励ます】(7 記録単位：14.0%)「頑張ろうね」,「がんばれ」等の記述から構成された．

③【進行状況を伝える】(7 記録単位：14.0%)「あともうちょっと（少し）だよ」,「あとはテープぺったん（ってはるだけ）だよ」等の記述から構成された．

④【動かないように伝える】(6 記録単位：12.0%)「うごかないでね」等の記述から構成された．

(3)　3 歳児への点滴処置後のことばかけ

医師では，合計 18 個のことばかけがみられ，【頑張りを認める・褒める】,【終わったことを伝える】等の 4 カテゴリーが抽出された．

①【頑張りを認める・褒める】(14 記録単位：77.8%)「がんばったね」,「よくがんばったね」等の記述から構成された．

②【終わったことを伝える】(2 記録単位：11.1%)「もう終わったよ」,「おしまーい」の記述から構成された．

看護師では，合計 52 個のことばかけがみられ，【頑張りを認める・褒める】,【感謝する】等の 4 カテゴリーが抽出された．

①【頑張りを認める・褒める】(42 記録単位：80.8%)「がんばったね」,「よくがんばったね」,「えらかったね」,「すごいよ」,「(動かないで上手に / 上手に) できたね」,「えらいえらい」,「じょうずだったよ」等の記述から構成された．

②【感謝する】(6 記録単位：11.5%)「がんばってくれてありがとうね」等の記述から構成された．

表 1　点滴処置を受ける 3 歳児への医師・看護師のことばかけ

上段・・・カテゴリー名　下段・・・(数 / %)

処置前		処置中		処置後	
医師	看護師	医師	看護師	医師	看護師
今からすることを伝える (5 / 20.8)	今からすることを伝える (21 / 39.6)	すぐ終わるということを伝える (5 / 25.0)	頑張りを認める・褒める (20 / 40.0)	頑張りを認める・褒める (14 / 77.8)	頑張りを認める・褒める (42 / 80.8)
励ます (4 / 16.7)	点滴の根拠・理由を伝える (15 / 28.3)	動かないように伝える (4 / 20.0)	励ます (7 / 14.0)	終わったことを伝える (2 / 11.1)	感謝する (6 / 11.5)
痛いということを伝える (3 / 12.5)	励ます (7 / 13.2)	励ます (3 / 15.0)	進行状況を伝える (7 / 14.0)	あやまる (1 / 5.6)	点滴の効用を伝える (3 / 5.8)
点滴の根拠・理由を伝える (3 / 12.5)	頑張れる方法を提案する (4 / 7.5)	頑張りを認める・褒める (2 / 10.0)	動かないように伝える (6 / 12.0)	感謝する (1 / 5.6)	進行状況を伝える (1 / 1.9)
泣いてもいいことを伝える (3 / 12.5)	今の身体の状態を伝える (2 / 3.8)	今からすることを伝える (2 / 10.0)	痛いということを伝える (4 / 8.0)		
動かないように伝える (3 / 12.5)	手を出すように伝える (2 / 3.8)	痛いということを伝える (2 / 10.0)	泣いてもいいことを伝える (2 / 4.0)		
あやまる (1 / 4.2)	動かないように伝える (1 / 1.9)	進行状況を伝える (1 / 5.0)	気をそらす声をかける (1 / 2.0)		
挨拶する (1 / 4.2)	すぐ終わるということを伝える (1 / 1.9)	我慢するように伝える (1 / 5.0)	共感する (1 / 2.0)		
我慢するように伝える (1 / 4.2)			今からすることを伝える (1 / 2.0)		
			あやまる (1 / 2.0)		

2）点滴処置を受ける 5 歳児への医師・看護師のことばかけ（表 2）

(1)　5 歳児への点滴処置前のことばかけ

医師では，合計 30 個のことばかけがみられ，【動かないように伝える】，【励ます】，【今からすることを伝える】，【点滴の根拠・理由を伝える】等の 9 カテゴリーが抽出された．

①【動かないように伝える】（6 記録単位：20.0%）「じっとしていてね・うごかないでね」等の記述から構成された．

②【励ます】（5 記録単位：16.7%）「がんばろう」，「がんばってね」の記述から構成された．

③【今からすることを伝える】（5 記録単位：16.7%）「注射するよ」等の記述から構成された．

④【点滴の根拠・理由を伝える】（5 記録単位：16.7%）「大事だから」，「バイキンをやっつけるために」，「病気が早くよくなるから」，「元気になるために」，「ごはんのかわりの点滴とバイ菌をやっつけるお薬を入れるための」の記述から構成された．

看護師では，合計 72 個のことばかけがみられ，【点滴の根拠・理由を伝える】，【今からすることを伝える】，【励ます】等の 9 カテゴリーが抽出された．

①【点滴の根拠・理由を伝える】（23 記録単位：31.9%）「バイキンをやっつけるお薬を入れる為（を使うね）」，「(B くんの中にいる）バイキンさんやっつけるために」，「B くんのおねつとコンコン（ゴホゴホ）治すために（お薬を使いたい）」，「薬のために」等の記述から構成された．

②【今からすることを伝える】（18 記録単位：25.0%）「（手に）ちっくんするよ」，「（手に）ストロー（管）を入れるよ」，「こっちのおててに（ここに）ちっくんさせてね」等の記述から構成された．

③【励ます】（9 記録単位：12.5%）「がんばれるかな」，「がんばろうね」等の記述から構成された．

(2)　5 歳児への点滴処置中のことばかけ

医師では，合計 22 個のことばかけがみられ，【動かないように伝える】，【すぐ終わるということを伝える】等の 8 カテゴリーが抽出された．

①【動かないように伝える】（8 単位記録：36.4%）「動かないでね」，「動いたらもう 1 回になっちゃうから（もう一回しなくちゃいけないから）」等の記述から構成された．

②【すぐ終わるということを伝える】（5 記録単位：22.7%）「すぐ終わるよ」等の記述から構成された．

看護師では，合計 48 個のことばかけがみられ，【頑張りを認める・褒める】，【励ます】，【動かないように伝える】，【進行状況を伝える】等の 10 カテゴリーが抽

表 2　点滴処置を受ける 5 歳児への医師・看護師のことばかけ

上段・・・カテゴリー名　下段・・・（数 / %）

処置前		処置中		処置後	
医師	看護師	医師	看護師	医師	看護師
動かないように伝える (6 / 20.0)	点滴の根拠・理由を伝える (23 / 31.9)	動かないように伝える (8 / 36.4)	頑張りを認める・褒める (12 / 25.0)	頑張りを認める・褒める (13 / 72.2)	頑張りを認める・褒める (41 / 78.8)
励ます (5 /16.7)	今からすることを伝える (18 / 25.0)	すぐ終わるということを伝える (5 / 22.7)	励ます (9 / 18.8)	終わったことを伝える (3 / 16.7)	感謝する (4 / 7.7)
今からすることを伝える (5 / 16.7)	励ます (9 / 12.5)	頑張りを認める・褒める (2 / 9.1)	動かないように伝える (9 / 18.8)	点滴の根拠・理由を伝える (1 / 5.6)	点滴の効用を伝える (3 / 5.8)
点滴の根拠・理由を伝える (5 / 16.7)	痛いということを伝える (6 / 8.3)	励ます (2 / 9.1)	進行状況を伝える (7 / 14.6)	感謝する (1 / 5.6)	終わったことを伝える (2 / 3.8)
泣いてもいいことを伝える (3 / 10.0)	頑張れる方法を提案する (6 / 8.3)	今からすることを伝える (2 / 9.1)	今からすることを伝える (4 / 8.3)		痛くないことを伝える (1 / 1.9)
痛いということを伝える (3 / 10.0)	動かないように伝える (5 / 6.9)	痛いということを伝える (1 / 4.5)	頑張れる方法を提案する (3 / 6.3)		共感する (1 / 1.9)
あやまる (1 / 3.3)	点滴の効用を伝える (2 / 2.8)	進行状況を伝える (1 / 4.5)	かけ声をかける (1 / 2.1)		
挨拶する (1 / 3.3)	手を出すように伝える (2 / 2.8)	我慢するように伝える (1 / 4.5)	すぐ終わるということを伝える (1 / 2.1)		
我慢するように伝える (1 / 3.3)	共感する (1 / 1.4)		共感する (1 / 2.1)		
			あやまる (1 / 2.1)		

出された．

①【頑張りを認める・褒める】(12 記録単位：25.0%)「つよいね」,「えらいね」等の記述から構成された．

②【励ます】(9 記録単位：18.8%)「がんばろうね」,「がんばれ」等の記述から構成された．

③【動かないように伝える】(9 記録単位：18.8%)「うごくと危ないから」等の記述から構成された．

④【進行状況を伝える】(7 記録単位：14.6%)「もう少しでおわるから」等の記述から構成された．

(3)　5 歳児への点滴処置後のことばかけ

医師では，合計 18 個のことばかけがみられ，【頑張りを認める・褒める】,【終わったことを伝える】等の 4 カテゴリーが抽出された．

①【頑張りを認める・褒める】(13 記録単位：72.2%)「よくがんばったね」,「がんばったね」等の記述から構成された．

②【終わったことを伝える】(3 記録単位：16.7%)「(もう) 終わったよ」,「もうおしまいだよ」の記述から構成された．

看護師では，合計 52 個のことばかけがみられ，【頑張りを認める・褒める】,【感謝する】等の 6 カテゴリーが抽出された．

①【頑張りを認める・褒める】(41 記録単位：78.8%)「よくがんばったね」,「えらかったね」,「がんばったね」,「すごい」,「じょうずだったよ」,「じょうずにできたよ」の記述から構成された．

②【感謝する】(4 記録単位：7.7%)「ありがとう」,「がんばってくれてありがとう」の記述から構成された．

3)「点滴」を説明する際のことばかけ（表 3）

「点滴」を説明する際のことばかけとして，「ちっくんする」,「ばいきんをやっつけるため」,「バイキンやっつけるお薬を入れる」,「おくすりを使う（入れる）」,「熱（おねつ）と咳（コンコン / ゴホゴホ）治すために」,「(手に) ストロー（管）を入れるよ」,「点滴の針を入れる」,「元気になるために」,「薬のために」等の合計 95 個のことばかけがみられた．

表 3 「点滴」を説明する際のことばかけ

ことばかけ	数
ちっくんする	34
ばいきんをやっつけるため	12
バイキンやっつけるお薬を入れる	7
おくすりを使う（入れる）	6
熱（おねつ）と咳（コンコン / ゴホゴホ）治すために	4
(手に) ストロー（管）を入れるよ	3
点滴の針を入れる	2
元気になるために	2
薬のために	2
その他	23
合計	95

V. 考察

1. 幼児への点滴処置時に医師・看護師が使用することば

抽出された全 21 カテゴリーを，[子どもの力を引き出す],[子どもの権利を尊重する],[子どもの主体性を促す],[子どもに安心感を与える] の 4 つに大別し考察した．

1) 子どもの力を引き出す

看護師において，処置中，5 歳児に比べ 3 歳児の方が【頑張りを認める・褒める】が多くみられる．医師において，看護師と比べ，処置中，3 歳児・5 歳児ともに【頑張りを認める・褒める】が少なかった．これは，医師は処置を行っており，処置に集中する必要があるためであると考える．3 歳児・5 歳児への処置後，【頑張りを認める・褒める】が一番多くみられた．3 歳児は幼児前期にあたり，自律心が育まれていく時期であるため，頑張りを認める・褒める行為は自律の心を育むために重要となってくると考える．また，子どもの頑張れた自己の認識（自分の頑張りの自覚，重要他者に求める頑張りへの承認，他者から承認された頑張りへの喜び等）において，子どもの頑張りを看護者や重要他者からの共感的評価の重要性が示されている（吉田・楢木野，2012）ように，子どもの頑張りを認める・褒めることで，子どもは自己調整機能を発揮することができ，次に点滴処置を行う際に前向きに処置に臨むことができるようになると考える．処置後だけでなく処置中も，医師からも子どもの頑張りを認める・褒めることでより自己調整機能を発揮することができ，次に点滴処置を行う際に前向きに処置に臨むことができるようになると考える．

2) 子どもの権利を尊重する

医師において，3 歳児・5 歳児への処置前に【泣いてもいいことを伝える】がみられており，看護師においては，3 歳児への処置中に【泣いてもいいことを伝える】がみられている．これらは，入院している子どもの権利としての，「自分がつらい時，大声で泣いたり，叫んだり，いやだと訴える権利」(小田，2001) にあたると考える．また，看護師において，3 歳児への処置前に【今の身体の状態を伝える】がみられている．今

の身体の状態を伝えることで，点滴の根拠・理由と関連づけることができるようになり，より子どもの理解を深めることにつながると考える．小児看護領域の看護業務基準（日本看護協会，1999）の中の [説明と同意] の項目において，「子どもは，その成長・発達の状況によって，自らの健康状態や行われている医療を理解することが難しい場合がある．しかし，子どもたちは，常に子どもの理解しうる言葉や方法を用いて，治療や看護に対する具体的な説明を受ける権利がある」とされている．3 歳児でも 5 歳児でも治療や看護に対する具体的な説明を受ける権利があるため，その子どもの成長・発達の状況に合わせた説明を行う必要がある．

3）子どもの主体性を促す

医師において，処置前・処置中ともに，3 歳児に比べ 5 歳児では【動かないように伝える】が多くみられる．5 歳児は，大人の要求を受け入れ，自分も満足感を得られるようになり，期待される役割を演じることができるようになる．そのため，動かないように伝えることで，3 歳児に比べ，自分で動かないようにすることができると医師が認識しているためであると考える．看護師において，3 歳児・5 歳児への処置前に【手を出すように伝える】がみられている．このようにして，子どもに対してどのようにして欲しいかを伝えることで，主体性を促す関わりにつながると考える．

4）子どもに安心感を与える

医師において，3 歳児・5 歳児への処置中に【すぐ終わるということを伝える】がみられている．また，看護師において，5 歳児への処置中に【すぐ終わるということを伝える】がみられている．すぐ終わるということを伝えることによって，子どもに対し，安心感を与えることができると考える．しかし，後で呼びに来ると言われていた状況で，「後でって，いつ？」と子どもが理解する（江本，2010）ことがあるということを考えると，子どもの混乱を避けるために，不確定な時の長さを示す言葉を安易に用いないような配慮が必要であると考える．

2.「点滴」を説明する際のことばかけ

静脈留置針について，「点滴」ということばをそのまま用いて，「点滴の針」という風に表現しているものもあれば，「ストロー」ということばを用いて表現しているものもみられた．また，点滴のことを「ごはんのかわりの点滴」，「お水」，「バイキンをやっつけるお薬」と言い変えている．幼児後期には「感染の概念」が現れ，その後，感染の概念には「ばい菌」という介在物が加わり，アニメに登場する「ばいきんまん」のように擬人化されたキャラクターを病気の原因として理解する（市江 , 2014）とあるように，「ばい菌」という介在物を理解することができると考え，細菌を「バイキン」ということばに置き換えて使用していると考える．さらに，看護師は幼児後期よりも幼児前期には日常的で広く用いられることばよりも音や声や状態をまねて表現していることばであるオノマトペを用いる方が理解につながる（和田，2012）と考えられているように，理解を促すために「ちっくん」や「コンコン」「ゴホゴホ」等のオノマトペを用いることは効果的であると考える．

「点滴」をはっきり言い換えることばはなく，ものの形や，効用で説明を行っているということが明らかになった．点滴の針は継続して子どもの手（腕）に留置されているということの説明はみられなかったが，その時だけではなく，留置されているということの説明も必要となってくると考える．

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は，1 施設の医師・看護師を対象者としており，抗生剤の点滴に限定した研究であるため，実際の全ての状況を言い得ているかには限界がある．今後は，明らかになったことばの実際を実践へと方向づけ，幼児期の子どもへの説明内容を検討していく必要がある．

VII. 結論

1. 点滴処置を受ける幼児への医師・看護師のことばかけ

抽出された全 21 カテゴリーは，[子どもの力を引き出す]，[子どもの権利を尊重する]，[子どもの主体性を促す]，[子どもに安心感を与える] の 4 つに大別できた．

子どもの力を引き出すにおいては，【頑張りを認める・褒める】，【感謝する】，【気をそらす声をかける】，【動かないように伝える】，【あやまる】がみられた．看護師において，処置中，5 歳児に比べ 3 歳児の方が【頑張りを認める・褒める】が多くみられる．医師において，看護師と比べ，処置中，3 歳児・5 歳児ともに【頑張りを認める・褒める】が少なかった．

子どもの権利を尊重するにおいては，【点滴の根拠・理由を伝える】，【点滴の効用を伝える】，【今の身体の状態を伝える】，【今からすることを伝える】，【痛いということを伝える】，【泣いてもいいことを伝える】が

みられた．医師においては 3 歳児・5 歳児への処置前，看護師においては 3 歳児への処置中に子ども権利を尊重することばかけがみられている．

子どもの主体性を促すにおいては，【頑張れる方法を提案する】，【動かないように伝える】，【手を出すように伝える】がみられた．医師において，処置前・処置中ともに 3 歳児に比べ 5 歳児で主体性を促すことばかけが多くみられている．また，看護師において，3 歳児・5 歳児への処置前に主体性を促すことばかけがみられている．

子どもに安心感を与えるにおいては，【すぐ終わるということを伝える】，【進行状況を伝える】，【終わったことを伝える】，【かけ声をかける】，【挨拶する】がみられた．医師においては 3 歳児・5 歳児への処置中に，看護師においては 5 歳児への処置中に安心感を与えることばかけがみられている．

2.「点滴」を説明する際のことばかけ

点滴をはっきり言い換えることばはなく，物の形や，効用で説明を行っているということが明らかになった．

利益相反

本研究における利益相反は存在しない．

文献

江本リナ（2010）．子どものケアに必要な看護技術 ケアを受ける子どもへの説明と同意．筒井真優美 編，小児看護学 子どもと家族の示す行動への判断とケア（第6版，144–146）．愛知県：日総研．

石舘美弥子・谷田部かなか・山下麻実・宍戸路佳・久保恭子・鈴木久美子（2014）．医療場面において幼児に関わる看護師が用いるオノマトペの検討．小児保健研究，73（3），453–461．

石舘美弥子・山下麻実・いとうたけひこ（2015）．小児医療場面において看護師が幼児とのコミュニケーションに用いるオノマトペの特徴．小児保健研究，74（6），914–921．

市江和子（2014）．小児看護学（第1版，132–133）．東京都：オーム社．

日本看護協会（1999）．小児看護領域と看護業務基準

二宮啓子（2000）．検査・処置を受ける子どもへの説明と納得の過程における医師・看護者・親の役割．小児看護，23（13），1739–1743．

小田慈（2001）．子どものがん―治療と問題点―．小児保健研究，60（2），131–136．

和田久美子（2012）．処置・看護ケア場面における幼児に対する看護師のことば．小児保健研究，71（1），85–91．

和田久美子，渡邉富美子（2014）．看護ケアで使われることばの理解に関する検討―幼児の生活の中にあることばの調査から―．小児保健研究，73（6），869–873．

吉田美幸・楢木野裕美（2012）．看護師が捉える点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの自己調整機能．日本小児看護学会誌，21（2），1–8．

要　旨

点滴処置を受ける幼児への医師・看護師のことばかけを明らかにすることを目的として，A 病院に勤務する小児科医師，小児病棟看護師を対象に研究を行った.

抗生物質の点滴処置を受ける 3 歳児と 5 歳児の事例を提示し自由記述式質問を行い，Berelson,B. の内容分析を用いて分析を行った.

抽出された全 21 カテゴリーは，[子どもの力を引き出す]，[子どもの権利を尊重する]，[子どもの主体性を促す]，[子どもに安心感を与える] の 4 つに大別できた．子どもの力を引き出すにおいては，【頑張りを認める・褒める】，【気をそらす声をかける】，【動かないように伝える】等がみられた．子どもの権利を尊重するにおいては，【点滴の根拠・理由を伝える】，【点滴の効用を伝える】，【今の身体の状態を伝える】等がみられた．子どもの主体性を促すにおいては，【頑張れる方法を提案する】，【動かないように伝える】等がみられた．子どもに安心感を与えるにおいては，【すぐ終わるということを伝える】，【進行状況を伝える】等がみられた．「点滴」を説明するために使用することばとして，「ちっくんする」，「バイキンをやっつけるお薬」，「（手に）ストロー (管) を入れるよ」等のことばがみられた.

処置後だけでなく処置中にも医師からも子どもの頑張りを認める・褒めることでより自己調整機能を発揮することができ，次に点滴処置を行う際に前向きに処置に臨むことができるようになると考える．子どもは治療や看護に対する具体的な説明を受ける権利があるため，その児の成長・発達の状況に合わせた説明を行う必要がある．医師・看護師は子どもに対してどのようにして欲しいかを伝えることで，主体性を促す関わりにつながると考える．点滴をはっきり言い換えることばはなく，物の形や，効用で説明を行っているということが明らかになった.

キーワード：幼児，点滴処置，ことばかけ